

## 1. 沿革

本市の歴史についてはまだ十分明らかにされていない。しかし、市内各所から発見されている土器や石器あるいは住居の跡などから推察すると、有史以前から、この地に人が住んでいたことは明らかである。また、推古天皇の時代（約1380年前）に創建されたと伝えられる阿蘇神社の歴史からみて、すでにそのころは村落としての形態をそなえていたことが想像できる。

市の政治的支配は、今からおよそ1360年前の大化の改新によって、現在の府中市に武蔵国府が置かれ、その管下に属したことに始まる。その後、幾多の変遷を経て鎌倉時代に入り、ときの豪族三田・小宮両氏の領有に属して統括されること数百年に及んだが、やがて勢力をもった北条氏に滅された。そして、豊臣秀吉が全国を統一してからは徳川氏が新領主となり、それ以来、明治維新まで280年余り徳川幕府の直轄地となって、村づくりが進められてきた。特に承応3年（1654年）、羽村を取入口とする玉川上水が開削されてからは、江戸との交流が頻繁となり、この地に経済的繁栄をもたらした。

明治維新をむかえてからは、廃藩置県により、羽村・五ノ神・川崎の3村は菰山県の管轄となり、その後、明治5年（1872年）に神奈川県となり、第12大区6番組に属した。同7年には区画改正に

よって、第12大区第6小区と改称され、羽村・川崎・五ノ神・福生・熊川がその範囲となった。同11年（1878年）郡区町村編制の発布によって、前記の5カ村が合併し、多摩郡多摩村となり、翌12年に多摩郡が東西南北に分れたので、西多摩郡多摩村となった。ところが各村の間にさまざまな紛争がおり、明治15年、ついに5カ村が分立し、6年後の明治21年（1888年）に市町村制が実施された際、羽村・川崎・五ノ神の3村が合併して、羽村町の前身「西多摩村」が誕生した。

明治26年（1893年）西多摩郡は神奈川県から東京府へ編入されたことと併せ、翌年の青梅鉄道開設等が、村の文化の発展に大きな影響をもたらした。そのころの主産業は養蚕を主体とした農業で、特に明治末期から大正末期にかけて養蚕の最盛期にあった。しかし、昭和初期から、経済の不況と戦時体制への突入を契機として、次第に衰退の道をたどりはじめた。

戦後は、経済の復興と人口増加に対応した理想郷の建設を模索し、従来の純農村形態から脱皮せざるを得ない傾向をたどりつつ、一方では行政組織の拡充という点から、町制施行の気運が高まった。

こうして、昭和31年10月、永年親しまれてきた「西多摩村」から「羽村町」が誕生した。

昭和37年に市街地開発区域に指定され、工業団地の造成と区画整理事業が行われ、職住近接の住みよ

い都市として新しい町づくりが着々と進められた。

そして、平成2年10月の国勢調査で人口が5万人を越え、平成3年11月に「羽村市」として生まれ変わった。

## 2. 位置と地勢

羽村市は、東経 139° 18' 49"、北緯 35° 45' 51" (役所位置)、東京都の西部に位置している。

本市の東には横田基地、これに接して福生市、瑞穂町があり、西は青梅市、南は多摩川をへだててあきる野市に接している。

市の西端部から南端部にかけて多摩川が流れ、この多摩川を最低地として、北東から南西にかけて数段の階層をなし、また、北西から南東に向って傾斜している。

羽村市における最高地は、羽村神社付近の標高220mであるが、この地を除けば小作駅北西付近の標高171mが最高地で、漸次南東に低くなり、最南端である下河原では118mとなって、約50mの高低差がある。小作駅と羽村駅間についても、わずか2.5kmの距離で約20mの高低差があり、電車に乗っていたのでは少しも感じられない青梅線も、かなりの急勾配であることがわかる。

地層についてみれば、多摩川沿の沖積層を除き、そのほとんどが、関東ローム層となっている。

## 3. 気象

東京は、日本の気候区分では表日本式の関東型に入っていて、標準的気候区である。

都心から40kmほど隔たり、しかも武蔵野の原の続きである羽村市も、小差はあっても大体東京の気候に準じているといえよう。

降雨量は、年間1500mm～1700mm、降水日数は年間90日～115日程度で都心より多くなっており、また、年平均気温は14度～15度で、都心より若干低くなっている。毎年、冬から春さきにかけて乾燥し、秩父連山からの吹きおりにくる風に影響され、かつては、この地域特有の黄塵がまき起った。

## 4. 面積

本市の面積は、東西4.23km、南北3.27kmであり総面積9.91km<sup>2</sup>である。行政境界については、青梅市及び福生市との間に、若干の境界変更を行ったものの、行政面積には大きな変動はない。